

主 題：神のみこころを知り従う

聖書箇所：ローマ人への手紙 12章11節

人生を無駄にしてはならない、神はそのように私たちに警告されます。だから私たちは生かされている目的を知ることが必要です。私たちイエス・キリストを信じる者には務めが与えられています。大きな責任が神によって与えられています。それは、このイエス・キリストを証することです。このキリストのすばらしい救いを人々に伝えて行くことです。なぜなら、私たちは証し人として救われたからです。私たちが真剣に考えなければいけないことは、どうして神は私に今日という日を与えてくださったのかということです。なぜ、神は私に「今日」をくださったのでしょうか？あなたは偶然に今日生きているのではないのです。神があなたを生かしてくださっているのです。では、その生かしてくださっている神の目的は何なのでしょう？なぜあなたが生きているのかです。先ほど話したとおり、その目的は、この私たちのすばらしい救い主である神のことを人々に伝えて行くためです。そのために神は、私たちに「今日」を与えてくださったのです。

では、その大切な務め、責任をどのようにして果たして行くのでしょうか？もうすでに見て来たように、私たちの力ではそれは無理なのです。神の助けによってそれは可能です。神の恵みはすばらしいものです。霊的に死んでいた私を神は救い出してくださった、神のことが全然分からなかった、そのような私たちが神は憐れんでくださって、私たちに真理を教えてください、その真理を信じて行くようにと神が働いてくださったのです。それだけではありません。私たちはこうしてみことばを見ると、神の命令を知ります。神が何を望んでおられるのかを知ることができます。かつて律法を守ることによって救いを得ようと、そのように信じていた人々にとって、神の命令は非常に大きな重荷でした。こうすれば罪の赦しが得られる、こうすれば永遠のいのちを得ることができる、と神が私たちに命じられたとします。これをしなさい、あれをしなさいと。そうすると、私たちがすぐに気付くことは、私たちの力ではそれは達成することができないということです。神が律法を与えられたのはなぜでしょう？神が基準を示されたのです。それによって私たちがどれほどその基準からはずれた者であるかを明らかにするためです。でも人々は思ったのです。自分たちの力で頑張ればこの神の命令を守ることができる、神の律法を守って行くことができる、そして、私は救いを勝ち取ることができる。そのような目的で律法が与えられたのではなかったのです。律法によって私たちは神の基準から遠くはずれた者であり、それを完全に守ることなどできないことが分かるだけでなく、私たちが造られた神は私たちに何を期待しておられるのか、それが分かるのです。たとえば、すべての点できよくあるとか、すべての点で完全であるとか、それが神が私たちに望んでおられることです。かつての律法によって救いを得ると信じていた人たちは、その律法を見たとき重荷と感じたことでしょう。なぜなら、それを自分で守ることはできないし、自分で神の要求に応えることができるような、そのような正しいきよい者になることはできないと知っているからです。

では、今の私たちは神の命令、律法を見たとき、これを守らなければ救いを得ることはできないとは思いません。神の命令を見ると私たちはそこに神が私たちに望んでおられることが何かを知ります。そして私たちは、神さま、あなたの助けによってあなたの望んでおられる歩みを為して行くことができるように助けてくださいと、自分の力や知恵に頼って生きる生き方ではなくて、神の力と知恵に頼って生きる生き方、そのような歩みを私たちクリスチャンはするのです。だから、神の命令を見たときそれは重荷とはならないのです。逆に期待、希望となるのです。神がどのように私を変えて行ってくださるのかと。神は私たちに繰り返し、このように生きなさい、このように歩みなさい、とそのことを教えてください、みことばを見ると神のみこころはあふれています。神が何を望んでおられるか明確です。そして、私たちクリスチャンはそれを見ると、神さまこのように生きて行きたいです、どうぞ助けてください、あなたの助けが要ります、そうして神の恵みをいただきながら私たちは信仰の歩みを為して行くのです。そのように生きるのがクリスチャンであり、そのように生きた信仰の先輩たちが聖書の中にあふれています。

その中でも、私たちが注目したいのはパウロです。パウロは当時ローマに存在した教会のクリスチャンに宛てて「ローマ人への手紙」を書いています。彼らに励ましを与えています。このように生きて行きなさいと勧めをします。それが私たちが今日学んで行こうとする12章のところに記されています。12章1、2節を見ると、神に対して正しく生き続けて行きなさいと教えています。3節から21節までは人に対して正しく生き続けて行きなさいと、教えるのです。神に対して正しくありなさい、人

に対して正しくありなさいと。イエスが言われたことを思い出します。戒めの中で最も大切な戒めは何ですか？と尋ねたことにイエスが答えられたことは「神を愛すること、隣人を愛すること」でした。これはユダヤ人だけに教えられたことではありません。私たちにも同じように教えられているのです。パウロがそのことをここで命じているのです。「ローマ人への手紙」を見て興味深いことは、12章になってやっと「このように生きて行きなさい」という教えが始まって行くのです。1章から11章のうち、9-11章はイスラエルに関することで、1-8章でパウロは「神の恵み」を教えています。神がどんなにすばらしい恵みを与えてくださったのかを教えるのです。あなたは罪から解放された、あなたには聖霊が与えられている、あなたは神の子どもとされた、あなたは何があっても神から引き離されることはない、永遠が約束されていると、このように神が私たちに与えてくださったすばらしい恵みの数々を話した上で、パウロは12:1で「**そういうわけですから、**」と、このように生きて行きなさいと教えて行くのです。「**12:1 兄弟たち。私は、神のあわれみのゆえに、あなたがたにお願いします。あなたがたのからだを、神に受け入れられる、聖い、生きた供え物としてささげなさい。それこそ、あなたがたの霊的な礼拝です。:2 この世と調子を合わせてはいけません。いや、むしろ、神のみこころは何か、すなわち、何がよいことで、神に受け入れられ、完全であるのかをわきまえ知るために、心の一新によって自分を変えなさい。**」。そうすると、私たちがクリスチャン生活を為して行くために、私たちはしっかり神の恵みを覚え続けて行くことが必要なのです。別の言い方をすると、私たちは常に神がどんなに私を愛してくださり、どんなに大きな犠牲を払ってくださったのかを忘れてはいけないということです。イエスの十字架とその復活のみわざを常に覚えて歩むことが必要です。そうでなければ、私たちが経験したように、同じ働きを継続してやっとながら、心の状態が違ふのです。ある時は喜んでしていたことが、ある時からただの義務感で行なってしまうことになる危険性があるのです。やっているけれど喜びがなくなってきた、感謝がなくなってきたと…。パウロがこのようにみことばを記した様子を見て行くと、私たちに必要なことはどんなときにも神の恵みがどれほど偉大なものであるかを忘れてはならないことです。いつも私たちはキリストの十字架を見て、復活の主を覚えて、このすべてのみわざが私のためであった、ここまで私は愛されていることをしっかり覚えて生きることが、どれほど私たちにとって大切なことでしょうか。神の恵みを語ったあとパウロは、このような祝福をいただいたのだから、あなたは神の前にふさわしい新しい人生を歩む責任があるのだと、彼は教えて行くのです。

3-2 1節は人に対する行ない、人に対して正しくあれとパウロは教えるのですが、もう少し詳しく見ると、3節に「**私は、自分に与えられた恵みによって、あなたがたひとりひとりに言います。だれでも、思うべき限度を越えて思い上がってはいけません。いや、むしろ、神がおのおのに分け与えてくださった信仰の量りに応じて、慎み深い考え方をしなさい。**」と、ここに神はクリスチャン各自に特別の賜物を与えていることを教えています。「**神がおのおのに分け与えてくださった**」と。同じパウロがIコリント12:18でこのように言います。「**しかしこのとおり、神はみこころに従って、からだの中にそれぞれの器官を備えてくださったのです。**」と、これは私たちの肉体のことではないことは明らかです。イエス・キリストを信じるすべての人が属するキリストのからだのことです。私たちの肉体がそうであるように、いろいろな器官からなっていて、そのすべての器官が大切であるように、イエスを信じている人々は大切な存在だと言うのです。だから神は皆さん一人ひとりに特別な賜物を与えられているのです。何度も言うように、だからクリスチャンは、私なんて役に立ちませんとか、私なんて何もできませんとか、私なんて生きている資格がない、価値がないなどという偽りにだまされてはいけません。神はあなたは特別だと言われているのです。私たちは神の言われることに立たなければいけません。この世界広しといえど、あなたと同じ賜物をもった人は二人としていないのです。そして、神が今日を生かしてくださっているということを見たとき、間違いなく、神はあなたを使ってくくださるのです。パウロはそのことを言うのです。

同時に4-8節を見ると、その賜物をどのようにすればいいのかを教えます。みことばが教えることはその賜物を他の人のために使いなさいということです。つまり、働くことです。その賜物を用いて主に仕えて行くこと、人々に仕えて行くこと、教会に仕えて行くことです。同じIコリント12:7には「**しかし、みな益となるために、おのおのに御霊の現われが与えられているのです。**」とあり、あなたに神から与えられた賜物は他の人たちの益となる、それをあなたが用いることによって、あなたの周りの人たちがそれによって祝され、あなたと同じように成長するというのです。だから、クリスチャンは働こうとします、自分の賜物を生かそうとするのです。それによって自分も成長し、周りのみなも成長するからです。

そして、9節から最後まで見たときに、私たちが人々と接するときには愛をもって接することが必要だと言います。尊敬をもって接しなさいとも言います。たとえその相手が敵であったとしても、愛をもって正しく接して行きなさいと教えます。悪に対して悪で報いてはならないと。人間のつきあいはなかなか難しく、いろいろな人がいて、いろいろなことを言い、いろいろなことをする、しかし、私たちク

リスチャンの責任は、相手がどのような人であっても、どのようなことを言われたり、されたとしても、正しくあることだとパウロはここで教えるのです。

このようにパウロは教えて行くのですが、その中でも特に11節のみことばを私たちは今から見て行きます。恐らく多くの方がこのみことばを知っておられることでしょう。このみことばが書かれた額をみたこともあります。「**勤勉で怠らず、霊に燃え、主に仕えなさい。**」、パウロはここで三つの勧めを為しています。それは、クリスチャン一人ひとりがその人生を無駄に過ごさないためにです。そのために、私たちはこの三つの勧めをしっかりと覚えることが必要です。

☆人生を無駄にしないためにどのように生きて行くのか

1. 怠けない

怠け者になるなということ。『**勤勉で怠らず、**』とパウロは言いました。これはパウロだけが教えたわけではなく、ヘブル人の手紙の著者もそのことを読者たちに訴えるのです。ヘブル6：11-12「**そこで、私たちは、あなたがたひとりひとりが、同じ熱心さを示して、最後まで、私たちの希望について十分な確信を持ち続けてくれるように切望します。：12 それは、あなたがたがなまけずに、信仰と忍耐によって約束のものを相続するあの人たちに、ならう者となるためです。**」。怠けないで信仰の先輩たち、神に従っている人たちに**ならって生きて行くようにと勧めるのです。**また、パウロはガラテヤ6：9で「**善を行なうのに飽いてはいけません。失望せずにいれば、時期が来て、刈り取ることになります。**」と語っています。私たちは人々に善を行なっている、正しいことを行なっているが、なかなか変化が生まれず、状況が変わってこない、人が変わらない、そうすると私たちはもうあきらめてしまったり、仕方がないとなってしまいます。そうすると、これまで正しく生きて来たのに、善を行なってきたのに、そういう生き方を止めてしまおうと思ってしまう…。みことばは「**止めてはいけない**」と言います。継続してずっと人々に対して善を行なって行きなさい、失望するなと言います。なぜなら、必ずその良い働きに対して刈り取る日（祝福）がやってくるからと…。神が私たちに望んでいることは、どんなことがあっても、怠けることなく、神の前に正しいことを行なっていく、人々の前に正しいことを継続して行くのです。

2. 熱心でありなさい

二つ目にパウロが勧めることは、一つ目は否定的なことでしたが、今度は肯定的な勧めをすることです。熱心であれば、「**霊に燃え**」とあります。この「燃える」ということばは、沸騰するとか泡立つとか、比喩的に熱心、熱烈と、そういう意味のあることばです。この「**霊**」ということばを見ると、これは聖霊を指すという人もあり、ある人はこれは人間の霊のことだと言いますが、その辺りはなかなか分かりづらいのですが、どちらも関連するのです。というのは、聖霊なる神はイエスを信じた私たちの内なる人、私たちの霊に対して働きを為します。エペソ3：16でパウロはこのように語っています。「**どうか父が、その栄光の豊かさに従い、御霊により、力をもって、あなたがたの内なる人を強くしてくださいように。**」御霊の力によってあなたがたの内なる人を強くしてくださいようにと。私たちイエスを信じた者は神と交わりたいと思うし、神に喜ばれることをしたいと思えます。なぜなら、私たちの内が変えられたからです。生まれ変わったからです。そして、聖霊なる神は私たちの内に働いてそのような思いを強めてくださるのです。もっと主に仕えて行きたい、もっと主に喜ばれることをして行きたいと。そのことをパウロはエペソ3：16でも教えるのです。ですから神の働きを見たとき、神は私たちの心に働いて、私たちがどんな境遇にいても、どんな状況にいても、その中であって臆することなく熱心に奮い立ちみこころを行なっていくというそのような力、励ましを与えてくれるのです。

パウロが主によって励まされたときのことを記しています。使徒18：9-11「**ある夜、主は幻によってパウロに、「恐れなさい、語り続けなさい。黙ってはいけない。：10 わたしがあなたとともにいるのだ。だれもあなたを襲って、危害を加える者はない。この町には、わたしの民がたくさんいるから。」**と言われた。：11 **そこでパウロは、一年半ここに腰を据えて、彼らの間で神のことばを教え続けた。**」、この当時は新約聖書がまだ完成していませんでした。だから神は特別な方法で人々に語られました。幻や夢で神の啓示、神のメッセージを伝えたのです。でも、そういった時代は終わりました。神のみことばが完成した以上、神はそのような方法で私たちに特別なことを教える必要はないのです。私たちはこのみことばを見るときに、そこに神の完全な啓示を見るのです。これが神が人間に伝えたいメッセージです。そして、私たちはこの神の啓示を見てそこに神のみこころをはっきり知ることができるのです。主は幻によってパウロに語りかけます。「**恐れな、わたしがあなたとともにいるから**」と、この励ましは聖書の中で何度も神が人間に対してなされたことです。詩篇の著者がこのように語っています。「**私は山に向かって目を上げる。私の助けは、どこから来るのだろうか。：2 私の助けは、天地を造られた主から来る。**」、詩篇121：1-2のことばです。何という励ましのことばでしょう。こんな神が私たちとともにいてくださり、私たちを助けましてくださり、私たちに力を与えてくださるのです。ですから、イエスが昇天するときイエスは「**わたしは父にお願いします。そうすれば、父はもうひとりの助け主をあなたがたにお与えになります。その助け主がい**

つまでもあなたがたと、ともにおられるためにです。」（ヨハネ14：16）と言われました。神はちゃんと分かっておられるのです。私たちがどんなに弱い存在であるか、どんなに罪深い愚かな存在であるか…。だから、神は私たちがみことばに従い、神のみこころに沿って生きて行くために必要な助けを備えてくださったのです。聖霊なる神です。ここまで神は私たちに配慮してくださっているのです。私たちが自分の力で神の命令を守り、みこころに従って行こうとするならそれは重荷になりますが、神が備えてくださったその助けによってそのように歩いて行こうとするとき、私たちには希望が与えられます。神がどのように私を変えて行ってくれるのか、こんなに愚かで弱者を…。それがクリスチャンの希望です。神は言われたことを実現されます。私たちに特別な賜物を与えてくださり、神はそれを用いなさいと言われ、それを用いるために必要な助けを与えてくださっている、私たちは「分かりました神さま、私を使ってください」と主に自らを委ねて行くのです。

聖霊なる神が私たちの内に働きを為しておられるとき、別の言い方をすれば、聖霊なる神が私たちに支配しているとき、そのときには私たちは間違いなく喜び、感謝をもっています。そして、ますます神に従って行こうという思いを持ちます。私たちが本当に主によって贖われたことを喜んでいられるときは、このような思いが強いはずで、私たちが内側から自然に賛美が沸きあがって来ます。なぜこのようなことが私たちの内に起こるのでしょう？神がそのようにしてくださっているのです。それは聖霊なる神が私たちの内で働いておられるからです。私たちはこの聖霊なる神に満たされて、聖霊なる神の力や助けをいただいて、どのように生きて行くのでしょうか？簡単なことです。一つ目に、私たちがそのように望むことです。私たちの問題は、神に対して神の助けは要りません、自分の力でやってみますと言うことです。ちょうど、駄々っ子、わがままな子どもが助けを与えようとしている親の手を払い除けて、自分でやる！と言っているような様子…。私はあなたが言われた通りに生きて行きたいから、あなたの助けによって歩めるように助けてくださいと求めることが必要なのです。私たちが経験することですが、たとえば、問題を抱えている人から電話がかかって来たとき、私たちは最初に何をしましょう？祈ります。神さま知恵をください、どのように話せばいいかわからないです、神さま教えてください、と祈りながら話します。何も問題がないときでも私たちはそのように生きることです。そして、私たちは罪から離れなければいけません。罪を犯していながら聖霊が働くことなど不可能です。神に喜ばれる生き方をして行こうとするなら、神が喜ばれない生き方を私たちの生活から除かなければならないのです。だから、私たちは罪から離れて行くことが必要です。同時に、私たちはこのみことばをしっかりと蓄えて行くことが必要です。私たちに喜びや感謝がないとき、それほど主に従って行きたくないと思っているときの信仰生活は、間違いなく祈りもないし、みことばを読む時間もないし、キリストを証する時間もない、このように神との交わりの時間がないと、食べ物を食べないと体が痩せて行くように、私たちの信仰がどんどんやせ細って行きます。しかし、私たちは聖霊なる神に満たされながら、その助けをいただきながら歩いて行くことができるのです。だから、聖霊が私を支配し、みことばが私を支配する、そのようでありなさいと教えています。

3. 主の再臨を覚えること

ローマ12：11「…主に仕えなさい。」とあります。私たちはときに、私たちが為す働きにあつて、こんなことをしていてもいいのだろうか？と思うときがあります。私たちに必要なことは、私たちの働きは主に對して為していることをしっかりと覚えることです。私たちは主に仕えているのです、私たちは主のしもべなのです。写本にはこの「主に仕える」ということばに二つの読み方があります。「主に仕える」というのと「時に仕える」との二つです。日本語の聖書は「主に仕える」という訳を取りました。「時に仕える」というのは「機会を捉えなさい」ということです。パウロがエペソ5：15-16で「**そういうわけですから、賢くない人のようではなく、賢い人のように歩んでいるかどうか、よくよく注意し、16機会を十分に生かして用いなさい。悪い時代だからです。**」と言っています。「**機会を十分に生かし（なさい）**」と言いました。同じパウロがコロサイ4：5で「**外部の人に対して賢明にふるまい、機会を十分に生かして用いなさい。**」と言っています。外部の人、すなわち、イエスを信じていない人たちに対しても機会を用いなさいと言うのです。ガラテヤ6：10を見ると信者に対してこのように言います。「**ですから、私たちは、機会のあるたびに、すべての人に対して、特に信仰の家族の人たちに善を行ないましょう。**」と。ですから、相手が信者であろうとなかろうと私たちはあらゆる機会を用いて賢いことをやりなさいと言うのです。イエスを信じていない人は私たちの周りにあふれていますから、その方々が教会に来られたとき、私たちは祈りながら、神さま何とかこのすばらしい救いを伝える機会を与えてくださいと願います。すると、神はその機会を与えてくださいます。少しの時間でも…。クリスチャンと時間をとっているとき、その機会を用いて私たちはいっしょに神のすばらしさを証し、神を崇めることができます。時間を機会を捉えて行きなさいと言うのです。チャンスはある、すばらしい救いのメッセージを語る機会も、神のすばらしい恵みを語る機会もあふれているから、その機会を無駄にすることがないようにと。

また、私たちは主に仕えるしもべですから神の望んでおられることを行ない続けて行こうとします。パウロは使徒20：19でこのように言います。「私は謙遜の限りを尽くし、涙をもって、またユダヤ人の陰謀によりわが身にふりかかる数々の試練の中で、主に仕えました。」、いろいろな迫害があったけれど、その中で私は主に仕えて来たと言うのです。これがパウロの生き様でした。ですから、私たちもどんな時であっても、主に仕える者として仕えて行くことです。そして、私たちは主に仕える者であるから機会を用いるのです。私たちはいろいろな時に、神さまあなたに喜ばれることを為すことができますようにと祈りますが、神は助けてくださり、私たちを使ってくくださるのです。でも、もし私たちがそのような機会を逃してしまうならそれは残念なことです。パークレーという神学者はこう言います。「戻っては来ない事柄が三つある。放った矢、話したことば、失った機会」と。機会を無駄にしてはいけないと言うのです。今日生かしてくださっている神が今日機会をくださるのです。だから、その機会を有効に用いてこのキリストを証して行くようにと。Iコリント15：58に有名なみことばがあります。「ですから、私の愛する兄弟たちよ。堅く立って、動かされることなく、いつも主のわざに励みなさい。あなたがたは自分たちの労苦が、主にあってむだでないことを知っているのですから。」と、パウロは言います、あなたは主に仕えているのだ、そして、あなたが主のために為すどんなに小さなことも決して無駄ではないと。家に来るだれかにイエスの話をした、だれも聞いていないかもしれない、でも、神は見ておられ、その働きに対して報いを与えるというのです。

私はかつて、今のロシアがソビエトの時代にある教会でこのみことばを人々に語りました。そうすると、多くのロシア人たちがやって来て、もちろんことばは分かりませんでした、分かったことは、彼らは大変な状況の中で一生懸命主に仕えていたことです。いったい何が彼らを駆り立てて行ったのでしょうか？彼らが私に教えてくれたことは「主が帰って来られるから、もう主が帰って来られるから、そのときまで私は熱心に主に仕えて行きたい」でした。今の私たちもししっかり覚えなければいけないことです。私たちは主に仕える者です。こんなすばらしい特権に神は私たちを招き入れてくださったのです。悪魔に仕えていた者が主に仕える者になった、神によって変えられたからです。そして、その神が望んでおられることを私たちが実践するために必要な助けまで備えてくださった、だから、今私たちに必要なことは、どうぞ神さま私を使ってください、私はあなたに用いられたい、あなたのすばらしさを証して行きたい、ではありませんか？こんな私をあなたは救ってくださった、だから、残された短い人生をあなたのために生きて行きたいから私を使ってくださいと。これがみこころなのです。これを神は望んでおられるのです。問題は、みこころを知ってそれを実践するかどうかです。聞くだけでそれを行わないなら果たして主は喜んでくださるでしょうか？主のために為すことはどんな小さなことでも絶対に無駄ではない、主がそれに正しい報いをくださるから、だから、私たちは人が見ていようと見てまいと、自分が望むような結果が起ころうと起こらまいと、私たちは主が望んでおられること、主のみこころに従って生きて行こうとするのです。そんな報いを私たちはいただく資格などありません。なぜなら、神がそのわざを為してくださったし、神がすべてのことをしてくださったのだから、神がその祝福を受けるにふさわしいのです。でも、神は約束してくださったのです、主にあって無駄ではないと。

いかがでしょう、皆さんの人生は？無駄に日々を過ごしておられませんか？信仰者としてどこかで怠けておられませんか？パウロが言うことは「勤勉で怠らず、霊に燃え、主に仕えなさい。」です。このように生きて行きなさい、そうすれば、過ぎ去った時間は取り返すことはできないけれど、残された時間は正しく有効に用いることができます。そのように生きて行きましょう。パークレーがこのようなことも言いました。「人生は短い、しかも人生は永遠のための準備の場である、キリスト者は燃え尽きることはあっても、錆付くことはできない」と。あなたの信仰生活は錆付いていませんか？何を為すべきなのか、もう私たちには分かりました。どうぞ、そのみこころに従って生きてください。それが私たちのこの主に対する感謝の証のひとつです。